複雑な現代社会の課題解決に向けて ～「協治」の担い手を育成する～

ガバナンス研究科長　長畑 誠

現代社会に生きる私たちの暮らしは、「多様性」と「複雑性」という二つの特徴を持っています。例えば皆さんの近所には、家族構成も職業も趣味嗜好もまったく異なる多様な人たちが住んでいるのではないでしょうか。夫婦と子どもという核家族だけでなく、若い単身世帯もあれば、高齢者の夫婦だけ、あるいは独居高齢者の世帯もあるでしょう。各世帯の生計手段はバラバラで、出身もまちまち。場所によっては外国籍の住民も珍しくないでしょう。さまざまな障害がある人や、性的少数者の人も暮らしています。こうした「多様性」は地域社会だけでなく、学校や職場においても普通になってきています。

一方の「複雑性」。一人の人が直面する「困りごと」は、社会における多様な諸要素が複合的に組み合わさって生じています。新型コロナウイルス感染症の拡大で痛感させられたのは、これが単なる医療・公衆衛生と経済の問題に留まらず、私たちの仕事や暮らし、地域社会そのもののあり方を問い直している、ということです。こうした点を公共政策の側面から見ると、少数の専門家やリーダーによるトップダウンの政策で物事を完全に解決することは不可能であり、課題の当事者を含む多種多様な関係者たちが協働して考え、計画し、決定し、行動していくことが必要、となります。

私たち明治大学公共政策大学院ガバナンス研究科は、「ガバナンス」を「協治」と捉え、多様な関係者による協働を通した政策・施策の形成と実施・評価を重視しています。そんな私たちの「学び舎」もまた、「多様な人材が出会い、学びあう場」となっています。政治学・行政学・社会学等の学問的修養を積んだ教員とともに、行政や市民社会の現場における実務経験の豊富な教員が授業を担当しています。学生さんたちもまた、年齢も職業も経験も、国籍もまちまちで、多様なバックグラウンドを持っています。

多様な人々が出会い、それぞれの経験と最新の学問的知見とを繋ぎ、「コロナ後」の現代社会の諸課題を乗り越えるための新しい知を創り出す。そうした刺激的な場へ、多くの方々に参加していただきたいと願っております。

PROFILE

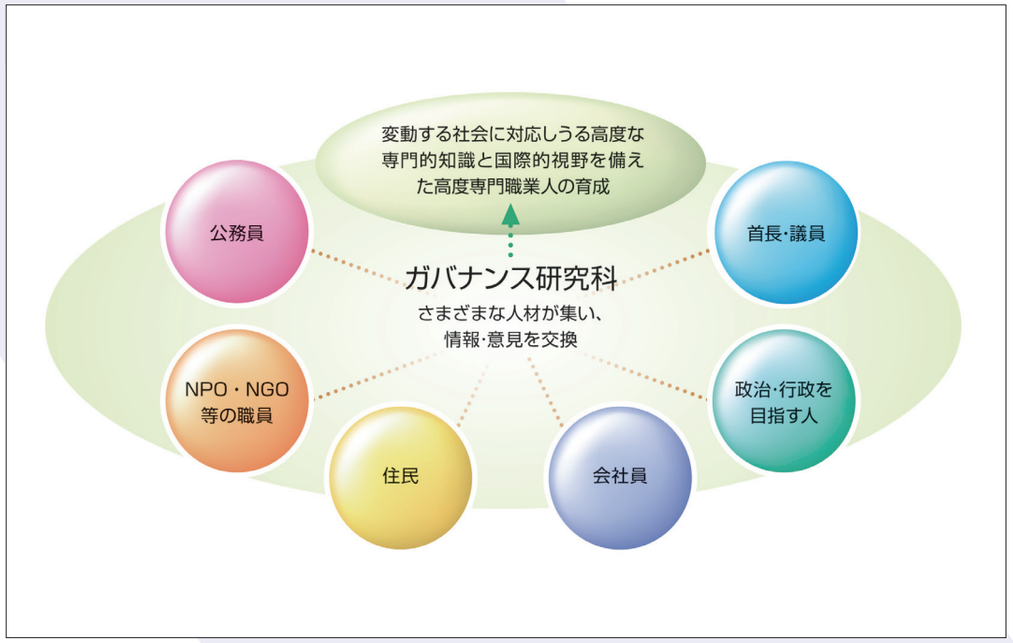
長畑 誠
Makoto Nagahata
専門職大学院ガバナンス研究科教授
専門:コミュニティ開発、非営利組織論

1961年　東京都生まれ
1985年　東京大学法学部卒業
1988年　上智大学大学院国際関係論専攻修士課程修了
同年～2002年　シャプラニール＝市民による海外協力の会　海外事業部長等歴任
2004年～　一般社団法人あいあいネット設立、代表理事
この間、JICA（国際協力機構）の技術協力プロジェクト短期専門家等を歴任
2011年より現職

主な著書・論文
「住民のイニシアティブはどう生まれるのか?」『ガバナンス研究 No.12』（ガバナンス研究科・2016年）
「ファシリテーション再考」『ガバナンス研究No.11』（ガバナンス研究科・2015年）
『国境をこえた地域づくり』（共著・新評論・2012年）
『進化する国際協力NPO』（共著・明石書店・2006年）

所属学会
国際開発学会

ガバナンス研究科の考え方



多様な学生の「まなびあい」でコロナ後の社会を創造する

専門職大学院ガバナンス研究科（公共政策大学院）は、新しい時代の政治や行政、公共の課題に対応できる高度な知識と視野を備えたプロフェッショナルを育成する独立研究科です。

本研究科の学生層は、地方議会議員や公務員、会社員、自営業の方、福祉や防災、国際協力等の専門家、NPOで活動する方、そして将来公共政策に関連した職種に就くことを目指す学部卒業生など多様です。また、教員は公共政策分野の第一線で活躍する実務家と、広範に学術的な知識を有した研究者が在籍しています。これらの教員が技術と理論を架橋した実践的な教育を展開し、多種多様な背景を持った学生がひとつの空間で対話しながら、まなびあい、直面する社会的課題の具体的な解決策を創造しています。

今年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、オンライン授業が中心となりましたが、Zoomによるリアルタイム配信型授業により、学生と教員がリモートであっても活発に議論し「コロナ後」の公共政策について学びを深めています。またオンライン談話室等を通じて学生同士の交流機会を設けるとともに、本研究科の特長のひとつである視察型授業では、リモートによるバーチャルフィールドトリップを実施し、日本人学生に加えてコロナ禍で来日できずにいる留学生が母国から参加して学びあうなど、コロナ禍の中でも新たな取り組みを行っています。